

シンポジウムの種

最終号 8月8日発行
宮城学院女子大学学芸員課程
2022年度シンポジウム実行委員会
連絡先 人間文化学科副手室
TEL 022-277-6166

二〇二二年度シンポジウム
終了しました



当日を振り返って…

運営部

運営部はシンポジウムの進行や学生発表、アナウンスなどを行いました。学生発表は前日のリハーサル以外も練習を行い、当日は最も良い発表を行うことができました。照明や運搬を行ってくれた方の仕事も成功には不可欠でした。全体として時間は押してしまいましたが、とても良いシンポジウムになったと思います。

広報部

当日の広報部は受付、誘導を行いました。また、当日まで主にシンポジウムを広報する活動を行いました。ポスター制作や送付、広報誌製作、メディア関係の仕事など、普段の学生生活ではできないことも多くあり、毎回新鮮な気持ちで臨みました。慣れない作業も多くありましたが、大きな経験になったと思います。

記録部

当日の記録部は、受付、誘導やシンポジウムの様子の撮影を行いました。それぞれが柔軟に対応することで、特に大きな問題もなく終えることができたと思います。記録部は報告書の作成作業が残っているので、次年度以降の実習生がスムーズにシンポジウムを行えるよう、詳細な報告書の作成に努めます。

編集後記

六月から計八号発行してまいりました。「シンポジウムの種」は、を通して学芸員課程に興味をもっていただけでしたら幸いです。今まで取材にご協力いただいた博物館の皆様、実習組の学生、各チーフ、先生方には心より感謝申し上げます。

シンポジウム「多様性と博物館～全ての人に開かれた博物館を目指して～」を7月23日に開催しました。今年度は2年ぶりに学外の方の参加も可能となりました。当日は本学の教員、在学生、他大学の学生、一般の方など多くの方が参加しました。

会場では学生発表や各博物館の取り組みの報告、テーマに関するパネルディスカッションが行われました。今後の博物館と学芸員の在り方について考えることができ実りあるシンポジウムとなりました。パネラーとして参加して下さった学芸員の方々、開催をサポートして下さった皆様に心より感謝申し上げます。

《予告》大学祭にて2つのイベントを実施します

企画展 「20年の軌跡—学芸員課程一眼レフ・フィルムカメラ実習を振り返る—」

会期:10月11日～16日 本学学芸員課程の特色である一眼レフカメラ撮影実習を、過去の優秀作品から振り返る企画展です。

シンポジウム “記憶する、伝える” 10月15日(土) 12:30-16:00 C201教室

佐川正敏氏 「考古学者が見たリアス・アーク美術館常設展—モノとコトバが呼び覚ます震災の記憶—」
パネラー・講演内容 長島榮一氏 「文化財行政より見た震災遺構」
山内宏泰氏 「災害遺構と伝承施設—モノと言葉の届け方について—」

☆詳細は本学HPで随時更新してまいります。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

学芸員課程の先生方からメッセージ

シンポジウムにお越しくくださった学芸員課程の先生方からシンポジウムのご感想や学芸員課程の学生に向けたお言葉をお寄せいただきました。

大平聡 先生

半年以上にわたって準備をしてきたシンポジウムが終わりました。生活文化デザイン学科の二人が最初に手をあげてくれたことが、学生主体に準備を進める原動力になりました。ほぼすべて、皆さんに任せました。時折少しだけ、助言めいたことをしたに過ぎません。三人のパネラーの方のご協力により、実に内容の詰まった議論ができたと思います。本番は終わりましたが、報告書の作成があります。また、10月15日にも大がかりなシンポジウムを行います。是非、参加して下さい。

内山淳一 先生

シンポジウム自体は進行も的確で、講師の方々も率直な思いを語ってくださっていたようです。まずは、運営に携わった皆さんのこれまでのご努力に敬意を表したいと思います。現場の声として、傾聴すべき多くの事柄が語られていましたが、とくに興味深かったのが、SNS等を通じての積極的な情報発信にきわめて前向きな発言がみられたことです。コロナ禍で人の動きが制約される時代のミュージアムの在り方として、大きなヒントになったように思えます。

大久保尚子 先生

みなさんでテーマを絞り込むところから積み上げた成果が感じられる大変充実した内容のシンポジウムでした。会場が教室ではなく講堂であったことで、より本格的なスタイルの催しとなった反面、例年とは異なる進行について検討事項も多かったと思います。苦勞された分、学びも大きかったのではないのでしょうか。シンポジウムのテーマについて、館務実習はもちろん、今後より多様な博物館施設の利用体験を重ね、考えていきたいですね。

山口一樹 先生

一つの企画を発案し、計画を立て、実行する、というプロセスは、講義や演習などとは異なる大変さがあり、それだけ貴重な経験になったのではないのでしょうか。当日は、壇上で進行するだけでなく、来場者の誘導や機材準備等、企画に携わる皆さんがそれぞれに役割を全うしようとしているところが印象的でした。学生発表やご登壇いただいたプロの学芸員の方々のお話は大変興味深く、私も勉強になりました。ぜひ今回の経験を今後の学びに活かしていただきたいと思います。

櫻井美幸 先生

まず、コロナ禍の中、外部に開かれた形でシンポジウムができたことは嬉しく思います。大学講堂は若干広すぎた気はしますが、会場から意見なども出て、活発な議論ができたのではないのでしょうか。若干気になったのは、少し台本に頼りすぎだったかなあ、ということです。もう少し掘り下げて議論してもいいかな、という話題もあったので多少勿体なかったかなと思います。最後に、会場整理・誘導などは例年に比べて完璧でした！

HPにて、学芸員課程主催イベント情報発信中！



←学芸員課程 2022 年度
HP はこちら！